筑波大学日本文学会会報

第32号

２００８年２月

〈文学散歩〉あれこれ（稲垣泰一）……1
稲垣先生のご退職に際して（清登典子）……3
日本文学会だより……4
研究室だより……6
新刊紹介……10
卒業生だより……12
日本文学会教官学生名簿……15

〈文学散歩〉あれこれ

稲垣泰一

つい先だって、久しぶりに京都に〈紅葉狩り〉に出かけた。十一月も末の旅であったが、今年は暖冬のせいか、見頃は例年より一週間ほど遅れているという。幸運であった。紅葉の名所は数々あろうが、京都に来たという雰囲気を味わうため、まずは清水寺に詣でた。舞台から下方一面に広がる燃え立つような紅葉の一群は、黄色味がかった色相と交じって鮮やかに映えていた。奥の院から子安の塔までゆっくり散策した後、これまた最も美しいと定評のある東福寺に向かう。参観者の列の後に続いて臥雲橋から眺めやると、目の前は真赤な波のように、いろは紅葉と唐楓（通称、通天紅葉という）が折り重なり、向こう岸に通天橋の回廊と橋脚が見渡される。まさに絵はがき通りのアングルである。境内に入って国宝の東司を覗き、京都三大門の一つとして知られる三門を真下から仰ぐ。通天橋をゆっくり渡って、橋下の紅葉のトンネルの渓谷を巡回し、その日は嵐山に泊まった。

翌日は亀山公園から大河内山荘・小倉の池の脇を通り、横道に入ると、眼前に落柿舎が見えた。思えば四十余年前の大学の三年次の実習旅行以来、何度か訪れたことがあったが、相変わらず前方には畑地があり、茅葺きの庵と小さな門、その脇には柿の木がたわわに実を付けて枝を垂れている。懐かしい光景である。ふと見ると、左隣に石造りの鳥居がある。思い当たるところがあって近付いて看板

を見ると、初代賀茂斎院、有智子内親王の御陵であった。心が揺れた。実は数週間前に校了した某出版社企画の『天皇皇族歴史伝説大事典』の項目執筆で、有智子内親王について書いていた。その御陵にも触れたが、ただ地番を記しただけであった。「落柿舎に隣接する」とでも添えておけばよかったと思ったのである。それにしても、これから訪れる祇王寺のすぐ手前にある檀林寺のことを考えると、つくづくある種の〈因縁〉を覚えざるを得なかった。檀林寺は嵯峨天皇の皇后、橘嘉智子が創建した寺院で、唐僧の義空を招いて禅学の道場としたという。皇后は薄葬を遺令し、嵯峨野に葬られた。美貌の誉れ高く、小野小町と同様に九相図・九相詩絵巻の素材となる伝承を残し、世に檀林皇后と呼称された。この皇后についても項目執筆していた。いつも嵯峨野を巡る際は、常寂光寺から始まり、二尊院・滝口寺・祇王寺へと進むが、この檀林寺は門前を通り過ぎるだけであった。今回はこんなことから是非とも拝観せねばと思っていたのである。

今年の十月初旬、大学院生諸君と両国から深川を巡り歩いた。回向院の鼠小僧の墓の裏手に山東京伝と加藤（橘）千蔭の墓がある。千蔭は『万葉集略解』の著作で知られる江戸時代末期の歌人・国学者である。数年前、故あって筑波大学附属図書館所蔵の版本の一部をコピーして、知人に用立てたことがあった。その加藤千蔭の墓がここにあることを改めて確認しながら（かつてはそれほど関心がなかった）、その時もある種の〈因縁〉を感じていた。

定年を間近に迎え、折をみては自分なりの〈文学散歩〉を試みている。その間思わぬ知見を得て心を躍らせたり、ささやかな文章のネタにしようと構想を練ったりして、ひとりで悦に入っている。時には実地見聞から意外な発見をすることもある。実に安上がりな娯楽で、安穏な一時を過ごせる〈文学散歩〉に心を寄せる年齢に達してしまった。これも目に見えない何かとの〈結縁〉だと勝手に納得している。

稲垣先生のご退職に際して

清　登　典　子

稲垣先生は、平成三年四月に着任されてから今日まで、十七年にわたり筑波大学における研究と教育のために力を尽くしてくださいました。実は私も同じ時に着任しましたので、先生とのお付き合いも十七年に及ぶことになりますが、その間に多くのお教えとお導きをいただくことができました。

説話研究をはじめとする中世日本文学研究の分野での先生のご業績の大きさは言うまでもないことですが、先生は決して威張られたり偉ぶられたりされることなく、若輩の私のような者にもいつも気さくに接してくださり、そのお話の楽しさに時間を忘れてしまうこともしばしばでした。とくに、お読みになった本について語ってくださるときは、的確な批評を交えて、それがどのような点ですぐれているのかを教えてくださり、聞いているこちらまで頭がすっきりと整理された気持ちになりました。先生が膨大な資料や文献、研究書を読破されていることは、研究室の机の周りに砦のようにうずたかく積み上げられていく書物の量からも推し量ることができるかと思いますが、先生が「この本が面白かったよ」とお奨めくださる本は、専門の学術書、研究書といったものにとどまらず、橋本治や斎藤美奈子の新刊本にまでおよぶ幅広い分野のもので、どれも本当に面白いものばかりでした。

また、地域研究研究科の入試の折には、日本史や民俗学、宗教学など日本文学以外の分野を志望する受験生に対する面接をご一緒にさせていただくことも多かったのですが、先生はどのような分野を志望する受験生に対しても常に的確な質問をなさるとともに、広い視野に立った上での研究への取り組み方や姿勢などについて厳しい中にもやさしさのあるゆったりとした口調でお話され、教育の一環としての入試というもののあり方や学生指導のあるべき姿について多くのことを学ばせていただくことができました。

最後に大変個人的なことになってしまいますが、私が要介護度5の母の入院、手術、介護の問題で悩んでいましたおり、すでにお母様のことでいろいろな経験を積んでいらっしゃった先生や奥様から多くの貴重な情報や親身になっての暖かなアドバイスを頂戴しまして、大変有り難く救われる思いがいたしましたことは忘れることができません。心から感謝いたしております。

稲垣先生、本当にありがとうございました。今後もお身体に気をつけられてご活躍くださいますとともに、私どもを暖かく見守っていただき、変わらぬご指導をいつまでも賜れますよう心よりお願い申し上げます。